
五神の国—傀儡達の狂想曲—

Mr.あいう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

五神の国―傀儡達の狂想曲―

【Nコード】

N0161X

【作者名】

Mr. あいう

【あらすじ】

剣と魔法、そして科学によってチカラを示す世界。そこには、五つの大国があった。人間が支配し、科学の発展した【賢の国】。エルフが支配し、伝統を重んじる【巧の国】。魔族が支配し、魔法の栄える【魔の国】。獣人が支配し、決闘の止まない【武の国】。万人が闊歩し、平等を掲げる【和の国】。五つの国は互いを牽制し合い、【和の国】を除いて合い間見えることはなかった。

中立区域にある大型ギルドに所属する冴えない青年ヨシキリは、ある日ロードと名乗る魔族の少女と出会う。その出会いが、五つの国

をも巻き込む【傀儡戦争】の始まりであつた事を、まだヨシキリは知らない。

尖塔にて（前書き）

これは、企画『五神の国』の小説です。

尖塔にて

まだ未発達な生命に無造作に押し付けられる自我という代物。それを受け取って初めて、誰かにとつての世界は幕を開けるのだ。

少女の原初の記憶は、途方もない驚愕だった。

目を開き、目を開いている自分が存在する事に対する驚愕。

（私がいる！）

それは何も知らない白紙の脳に描かれた最初の衝撃。

初めての思考という体験と、突如幼子に襲い掛かった自我という存在。

彼女は泣きだした。泣き出してから初めて自分が何かをしているという事に気づいた。

少女の内から生まれ頬をつたい自らを包む世界に落ちていくそれが何なのかは彼女には分からない。

彼女はそこで初めて自らの心の内に新たな何かが構築されている事に気づく。

私は何処にいるのか。

私は何時からいるのか。

私は何故、いるのか。

少女の心に芽生えたそれが疑問と呼ばれるものであることさえ彼女には分からない。

ただ求める苦しみと、それを与えられない痛みとが彼女の胸の内に渦巻いているのみだった。

彼女は泣く。その声のあまりのけたたましさに更に泣き喚く。

そして少女の心に生まれた初めての感情。それは、怒りだった。

彼女は憤る。己のいるこの世界が彼女をなにもわからぬまま突き

放したことに。

この世界が応えないことに彼女は怒りを抱いたのだ。

少女のまだ未発達の自我にある考えが浮かんた。

生まれて間もない赤子が抱くには余りに強烈な意思。

彼女が思い描いたのは、この世界への復讐だった。

それは存在さえ朧な記憶の残滓。

彼女の心に入った一筋の罅割れ。

それから、100年もの歳月が流れ……。

魔の国最大の国家ノルンの中心、王都ルーンマデイスには一際高い尖塔がある。

晴天であつてもその先端が見えないほど高いその塔は、魔法を持つてしか成し得ないであろうその異常なまでの高さから空の柱と称されていた。

その塔の役目は、大逆人の監禁。

その圧倒的な高さと、何重にもなされる防壁からは如何なる魔法を用いても出ることは許されない。

普段であればごく一部の看守しか立ち寄らないその塔の頂上、民衆にはおろか、大部分の貴族達にさえその存在を知らされないほどの罪人を拘束する最悪の監獄『無の狭間』に一人の男が訪れようとしていた。

宗教画の天使の如き現実味に欠けた美貌の青年、丁寧に後ろに撫で付けられた海色の頭髮とは対照的に燃え盛る業火のような赤の瞳に憂いを湛えた彼は、魔力伝導率の高い金剛石で出来ている風属性の魔法を用いた昇降機の窓から何の興味も無いかのように窓の外の風景に目を向けていた。

昇降機と行つても椅子と、窓と、ささやかなBGMを流す自鳴琴とが据え付けられた小部屋に近い空間である。その扉の前に立つて

いた看守が恐る恐るといった様子で彼に声を掛ける。

「アスクレイ様、この面会について事前に御連絡をいただいていないのですが……今回は一体どのような御用件で……」

「必要か？」

「は？」

アスクレイと呼ばれた青年は窓の外から目を離さずに淡々と言葉を吐く。

「兄が妹に会うのに理由が必要かと聞いている」

何の感情の起伏も無くただ看守との間に放り投げられた言葉。

だが、そのあまりの冷たさに看守は震え上がった。

「いえ……あ、それは……」

それきり昇降機の中で聞こえるのは自鳴琴の音色と看守の心音のみだった。

やがて、看守にとっては永遠とも言える時間の後、鈴の涼やかな音が目的地についた事を知らせた。

アスクレイが音も無く立ち上がる。

「お前はここにいろ」

「は？ し、しかし……」

大げさに狼狽する看守。規則では囚人との立会いには看守が必ず一人は付き添わなければいけないのだが、そのような指摘を青年に出来るはずも無い。

規則的な足音が昇降機から離れていく。やがて自動的に扉が閉まった後、看守は深々とため息をつき、恐る恐ると言った様子でハンカチを取り出し額の汗を拭った。

「久しぶりだね兄貴。最近誰も来ないから退屈だったんだぜ？」

檻の中の少女は少年のような口調で親しげに話しかけた。

檻と行っても何重にも結界を施された格子の向こうにあるのはホテルの一室のような空間。

その中央のベッドの上で嬉しそうに顔を上げる少女、まるで深い

森の中に生息する妖精のような風貌、空中に鮮やかに舞う兄と同じ色の髪は少年のように平たい胸の辺りまで伸びている。ただ、その髪奥でいたずらっぽく光っている眼は兄の海色よりやや濃い蒼穹。少女はベッドの上から飛び降りると、散乱している本の間を飛びはねるようにつま先で移動しながらアスクレイに近づいていく。その光景ですらまるで湖面を踊る妖精のように美しい。

「それで？ 王宮の方は最近どうだよ、古龍派がそろそろ兄貴達に寝返った頃かな？」

囚人として何ヶ月も何の情報も与えられていないはずの彼女は世間話でもするように現在の枢密院の情勢を当てて見せた。そんな少女の言葉に微かに眉をひそめつつも、なんでもない事のように聞き流しながらアスクレイは懷から一枚の書状を取り出し、檻の向こうの彼女にも見えるように格子に押し付けた。

「枢密院の過半数が貴様の死刑執行に同意した。期日は一週間後だ」「だろうね、古龍派はともかく図書館の連中はもう少し粘るかと思つてたけど」

自らの死刑執行を明日の空模様と同じような感動で受け止める少女。

「最後の生きるチャンスだ。『スフィア・オブ・ジェネシス創天球』の在り処を言え」

「ヤダね」

「トラバート・イルミス・フォン・グラマティラシュトラス！」

空気を震え上がらせるような希薄に満ちた怒号、だが少女はうるさそうに顔をしかめるだけだった。

「兄貴は良くそんな長ったらしい名前覚えてるよね。僕本人でさえ覚えてないってのに」

それに、と彼女は楽しそうに付け加える。

「僕の名前はロードだぜ？」

「何故、お前は自らの運命を受け入れようとしない。お前の才能があれば我が国家が魔の国を手の内に治めるのも容易いはずだ」

「またまたー、僕は嫌いなんだ。その生まれで運命が決まるってや

り方。そもそも何で勝手に付けられた名前なんか使わなきゃいけないだよ。僕は自分の名前くらい、自分の運命くらい自分で決める」
「その運命がここで途絶えようとしているんだ。一体、どういう魂胆だ？」

射すくめるような眼光と共に放たれた疑問に、彼女、ロードは満面の笑みで応える。

だが、その笑顔の質は先ほどとは全く異なっていた。
例えば、そう。

世界を滅ぼそうとする魔王は、おそらくこのような笑顔を浮かべるだろう。

「うん、ちょっとこの世界に復讐してやろうと思ってね」

と、まるで仮面が剥がれ落ちたかのように元の雰囲気に戻るとロードは柔らかな笑顔を浮かべる。

「ま、次は和の国辺りに行くつもりだよ。あの国のあり方には興味があるんでね」

「それは脱獄宣言か？」

チツチツチ、と。ロードは指を振り、にんまりと口角を吊り上げた。

「すでにそんな段階じゃないよ。ま、別れのあいさつと言ったところかな。それじゃ、また会おうぜ。たった一人の兄貴」

尖塔を見上げても頂上は見えない。

アスクレイはしばらく空の柱の前で立ち尽くしていた。

（また会おうぜ、だと……）

彼女が自らをロードと名乗り王宮の図書館に閉じこもったのが彼女が生まれて3年が経った頃。

それまでは彼は兄として、妹を理解しているつもりだった。

だが、再び図書館から出てきた彼女が最初にやった事と言えば、代々続くこの国の王族、その全ての死者の魔力を死体から抽出し集

約した魔力の結晶『スファイア・オブ・ジェネシス創天球』を盗み出し逃亡したことだった。

（あいつは一体、何をするつもりなんだ……）

いくら睨みつけたところで、地上の彼の視線は、天上の塔に閉じ込められる彼女には届かない。

いや、もしかすると閉じ込められてすらいないのかもしれない。頭を1度振ると、アスクレイは尖塔に背を向け、王宮へ向かう。その足取りは重い。

そして、それから一週間後……。

第一話 / 『雑種』

耳元を閃光が掠める。首筋に粘度のある汗が滲み出してきた。

その方向に拳銃を向けると、閃光の軌跡をなぞる様に眼前に迫る敵。ちよつと前までお前20メートルくらい後ろにいたろ、なんて文句を声にする間もなく鋭利なレイピアの切っ先が無防備な首元を襲う。

「解き束ねる空鞠からまり!!」

その代わりに口をついて出たのは馴染みある詠唱スプリクト、詠唱を短縮させるまで使い込んだのはこの魔法だけだ。言葉と共に発生したのは剣先と喉の間に急速に凝結する大気の塊。

だが、直撃こそ避けられたものの疾走する剣士の勢いまでは殺しきれず、俺は圧縮した大気と剣先の間に凝縮された勢いをモロに喉に食らって後方に吹っ飛ばされた。

背中、後頭部、頭頂と衝撃が移っていき、受身も取れずにうつぶせに倒れた。

土の香りが呼吸困難な喉に染みて痛い。顔を上げると剣士の側も少なからず被害をこうむったらしく丁度ヨロヨロと立ち上がったところだった。急いで拳銃を構えようとするが、握り締めたのは自分の手のひら。吹き飛ばされた拍子に拳銃はどこかへ飛んで行ったようだ。

小賢しい、そう唾棄するように俺の睨み付ける剣士はレイピアを構えなおし、挑発するように首を鳴らした。人間離れた長さの垂れた犬耳が揺れる。五国の民の中でも随一の膂力を持つ獣人の特徴だ。

だが、俺を睨みすえているその瞳は左右で色が異なる。

五神が定めた種の境界を無作法に跨ぐ種族のなり損ない、典型的なハイブリッドの特徴。

「雑種が……」

俺は揶揄を込めて吐き捨てると、眼前の剣士の気迫が怒気を孕んだ。

『世界を創りし主神がこの世界のあり方を記した最古の書物、^{エネシス}『創世記』にも記されているように、四つの種族はそれぞれ尊重し合い、互いに互いの守護者たる神と、それら総ての父である主神に信仰心を捧げる事こそより良い生き方であると定められている。』

だが、その定めに従う向から反対する存在、それがハイブリッドだ。

我々純潔種と対比して雑種とも呼ばれる彼らは主神の定めた種の境界を踏みにじり、そのどちらでもない『^{アナーキー}外律者』として秩序を乱している。

雑種風情に遅れを取るわけにも行かないので、俺も急いで立ち上がろうとして、こけた。

「雷、雷、炎、禍！ 焼け焼け燃やせ^{かんしゃくだま}癩灼球！」

体勢を崩して膝立ちになった俺の元へ四分の一ほどに簡略化された詠唱と共に飛んできたのは赤みがかったビー球、よくよく見ればビー球の中に火炎を象った模様が浮かび上がっているのが確認できるだろう。

詠唱があれば短かったのもうなずける。ガラスは火炎系魔法ではよく使われる^{マップ}魔符だ。

魔符とは術者の詠唱の簡略化の為に、魔法発動のための位置情報や発動条件、魔法陣の一部などを組み込んだ道具の総称で、魔力を内蔵して詠唱のみで発動できる使いきりの物を^{バレット}魔卵、魔法陣のみを内蔵した純粹に発動補助のための物を^{スタッフ}魔杖と呼ぶ。

今現在俺の目の前に飛んできているビー球は恐らく模様^{バレット}に火属性の意味を組み込み、ビー球そのものを媒介として火球を生み出す類の使い切りの魔晶だろう。

いくら魔法とはいえ無から有を生み出せるわけもなく、自分の魔力で全てを賄おうとすればたちまち燃料切れを起こす。ゆえに多くの魔法使いが魔力を内蔵した魔晶を使用するのだ。

と、脳内麻薬で鋭敏になった感覚が記憶の中から必死で情報を並べ立てるものの、肝心の事を忘れている気がする。火属性ならば水属性の魔法を使えば良いと思ったのだが、それが悪手のように思えてならない。が、兎にも角にもこのまま行けばこんがりと炙られるのみ、俺は懷から小さな水晶型の魔符を引っ張り出して眼前に放り投げつつ叫ぶ。

「アクアリマグナ、リキマグナ、アスクトラクトラ、メタラリカ！
アクア・カーベット
海色の絨毯！」

異文化の魔符は異なる言語を使わなければ反応しないが、何しろ単価が安く威力が大きいので若干精度に難があっても中級以下の魔法使いには根強い人気がある。

かくいう俺も先輩から安く譲り受けられるので重宝しているのだ。水晶の輪郭が崩れ、パチャリという軽い音と共に爆ぜた。

中から透明な液体が絶えることなく流れ出し、空中に盾の形となつて留まり、火炎となったビー球を受け止める。

ブルブルと震える水の盾がものすごい勢いで水蒸気になつていくが、その火球が水の壁を貫くことはない。が、しかし。

水蒸気の向こう側で微かに何かが光る。

（黄色のビー球？ …………… まずい！）

危険を察知して後方に大きく跳ばうと足に力を入れるも、時すでに遅し。

「雷、雷、白、白、びやくせうしつ白閃棘網！」

雷属性の友好色である黄色のビー球から紡がれた魔法は電撃魔法。通常直接電気で相手にダメージを与える電撃魔法は空気を伝導せず、直接触れなければ効果は無いのだが、辺り一面を覆う水蒸気が仇となりその電撃は威力を弱めながらも俺の体を直撃した。

頭蓋骨を直接シェイクされるかのような衝撃に意識を朦朧とさせながら俺は先刻の違和感の正体に気づく。

最初に奴が踏み込んできた初動の速さはいくら前衛の剣士であろうと明らかに体の構造を超えた初速で近づいてきた。その上、奴の

詠唱には火属性の魔法であろうと必ず『雷』の単語が加味されていた。

つまり、最初の初動は雷属性の魔法を用いた神経伝達速度のパンブアップ、わざわざ魔卵を用い、雷属性の魔法で発火を行うような下手な火属性の魔法を使ったのはこちらの水属性の魔法への誘い水つまり、本命は自分の一番得意な電撃魔法での一撃。それに俺はまんまと引っかったわけだ。

……なんて事に身体が効かなくなった今気づいても仕方ない。

俺は鉄条網を飲み込んだかのような激痛に耐え切れず、膝を地面に付いた。

その様子を見た審判が旗を上げる、風に靡く様が妙に目に付いた。「勝者……………」

審判が高らかに上げる声が妙にスローモーションに聞こえる。

悔しさも悲しみも追いつかず、ただ『負けた』という言葉で胸が満たされていく。

そんな中、視界にかかった靄の向こうから何かが高速で向かって来ている。

下段に構えた演習用の木刀、旗があがるのも構わず、その感情のまま向かってくるハイブリッドの剣士が身動きのとれない俺に疾風の勢いで向かって来ていた。

その瞳には、先ほどの俺の侮辱に対する怒りと、まだ若く荒々しい殺意が宿っている。

「……キカ……………」

木刀がつつと上がり、無防備に晒された俺の首元を狙う。

(……やば)

危機感を感じてもがこうとするも、俺は首一つ動かすことが出来ずに的になったまま。

吸い込まれるような軌跡を描いて襲うその切っ先は嫌になまめかしく見えた。

「……………ククロ……………」

勝者の名が叫ばれるのと、俺の首元にその切っ先が到達するのはほぼ同時。

だが、木刀は俺の喉仏の辺りを軽く撫でただけだった。

「ケタケタケタ、また活きのいい新人が入ってきたもんだ」

豪快な笑い声を上げ、薄紫色の髪を陽光にきらめかせながら円状の演習場に入ってきたのは遠距離からの魔法ならばギルドでも一、二を争う実力者と名高い魔法使い、アニス・ノクターンその人。その豪放磊落な性格と年齢を感じさせない美貌、そして伝説じみた数々の武勇伝（？）からギルド内での知名度、発言力は高い。

ギルドの一人が彼女に年齢を聞いた瞬間に消え、五秒後に空から降ってきて全治二ヶ月の重傷を負ったという話はギルドの人間なら一度は聞いた事のある逸話だ（速攻で電撃を見舞って酒場一件潰した、鋼鉄の鎧を中の奴の骨格ごと拳で粉碎した、など他にも幾つかパターンがある）。

「しかし、いきなり対戦相手を殺そうとするとはねえ。あたしも思わず加減を間違えたよ」

そう言って流し目をくれる彼女の足元にはうつぶせに倒れた雑種の剣士が横たわっている。

着ている衣類の端が焦げるほどの電撃を食らったらしく、時折小刻みに震えているのが痛々しい。

「スミマセン、私が居ながらこんな事態が起こったことは一重に私の未熟さゆえでありますがしかしこれは一種の不可抗力でありまして審判としての私の領分を超えた……………」

「あーあー、わかった。別にギルドに報告なんざしないよ。あたしが勝手にやったことだ。それより担架を持ってきた。そのあんだ、二人分いるかい？」

揉み手をしながら平身低頭近づいてきた審判を煩そうにいなしながら彼女は俺の方に手を差し伸べてきた。どうやら膝立ちの状態の

俺を見て動けると思ったのだろう。指先すら動かせない俺は差し伸べられた手を取ることなくうつぶせに倒れこんだ。

惜しい事をしたという思いが頭の隅をよぎったから多分それほど重傷ではないのだろう。

「電撃系の拘束魔法か。外傷はないけど動けないってことは神経が掻き乱されてるのね。てことは……」

頭上で杖を振る風きり音が一つ鳴ったかと思うと、この世のものと思えない歌声が聞こえてきた。

音階まで詠唱に組み込み、一つの唄として魔法を紡ぐ高等技術、その余りの難易度に現在ではごくわずかしが使い手しかない至上の歌声だ。

「天上の織り成す安寧の繭よ、雷雲の機で紡ぎし糸で優艶なる癒やしを紡げ。『天帝の揺り籠』ハイエンドクレイドル」

淡いオーロラのような光が俺の身体を包み込み、俺の身体を細部まで解きほぐしていく。

光が消えて立ち上がると、まだ微かな痺れは残るものの俺の身体は元に戻ったどころか絶好調と言って良い具合にまで回復していた。「微細なプラズマによる神経系の最適化だから外傷までは治せないんだよ。後で治癒師ヒーラーのところで治してもらいな」

「あ、ありがとうございます」

目を合わせられずにうつむいたままの俺。

なんというか、自分でも情けなくなるほどの有名人耐性の無さだ。「別に良いさ。それより、なんだってこの剣士にぶっ殺されそうになったんだ？」

「僕はただ事実を彼に言っただけです。全くハイブリッドは野蛮で困りますよね。なんであんな連中が同じギルドにいるのか全く……」

「うるさい」

アニス・ノクターンという伝説の魔法使いが自分の目の前にいて、自分に興味を持っているという事実、我ながら舞い上がっていた

のだろうと思う。俺は彼女の纏う空気がどんどん冷ややかになっていくのに気が付かなかった。

「あゝあ、あんたも純血至上主義者かよ。あたしはあんたみたいのが一番嫌いなんだよ。自分一人救われた気になって神をあがめちゃいるけど、あんた、その神の名において殺された人の数を数えてみた事があんのかい？ あんたがこいつを差別するってんなら、」

これ以上なく冷めた口調に、激情を忍ばせて彼女はそう吐き捨てた。

「あたしは、あんたを差別する」

颯爽と、真直ぐに演習場を後にする彼女の背中を、俺は直視する事が出来ず。

担架を運んできたギルドの仲間が肩に置いた手を、俺は乱暴に振り払って演習場を後にした。

まだ痺れの残る指先を、手のひらに握り締めながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0161x/>

五神の国—傀儡達の狂想曲—

2011年11月6日03時19分発行